

釣れ釣れなるままに

2013年思い出の釣行記 PART. 13

鹿島釣狂



青のアワビ貼りに来た

1年に1本は

1年に1度はシャケ釣りをしたいものだ。昨年の10月4日～5日にかけてシャケを爆釣したものだから、今回もその再現を狙って10月6日の日曜日の午後から月曜日の早朝にかけて箸別川に出かけてみた。やはり日曜日のせいか、河口には釣り人の姿がかなり見える。しかし、路上駐車が全くなくスッキリとしていた。その代わりに道路周辺には違法駐車を排除しようとするロープや看板が張り巡らされていたのだ。留萌警察署や増毛町役場が本格的に身乗り出して、厳しく取り締まっているようだ。

増毛港の入り口にある広い駐車場に車を停めて、そこから500m程を戻って、箸別川河口に入った。先客はウキルアーの釣り人ばかり30名ほどだったが、まだ誰にも釣果はないようだ。そして夕暮れが近づいてくるにつれて1人、また一人と去っていった。最後に残ったのは、私と子連れのウキフカセで釣りをしている人だけになった。私も周辺に人がいなくなったら河口の払い出しからウキフカセで沖に流していたのだ。

ゴツゴツとアタリが出た。このアタリはシャケに違いない。道糸から竿に伝わってくるアタリの間合いを図りながら大きく竿を煽った。掛かった。しかし、何だかシャケにしては頼りない。しかも途中でバレてしまった。河口には相当な数のアカハラが波間に見えていたので実のところはアカハラだったのかもしれない。明朝はこのアカハラを蹴散らすようにシャケが群れを成して岸寄りしてくることを期待しながら竿をしまった。

駐車場には、私の他に2台の車が停めてあったが、同じような思いで明朝を待っているのだろう。今日のこの不調を考えると平日の明日はさほど混み合うことはないだろうと酒を飲みながら眠りについた。

3時半に設定した目覚まし鳴った。深く被った毛布から顔を出してみると、駐車場には思いのほか車がびっしりと並んでいた。慌ててウェィダーに履き替えて500m程の道程を急ぎ足で河口に向かった。河口には20名ほどがすでに並んでおり、明け方に備えて息を殺して待っていた。私はシャケ釣りでも1本の竿立てを用意している。仕掛けを結んだり、ルアーを取り換えたりするときに便利だし、何より竿を石原に置きたくないのだ。そして、ウキフカセを結んだ竿をその竿立てに立てかけて明け方を待った。それは、この場所は自分に占有権があるのだぞという思いをこれからやってくる釣り人に示すためでもある。それを見ていた隣の釣り人が波打ち際に置いた荷物と竿を私に見守ってくれるように頼んでから、三脚をとり車に戻っていった。私の後にもブッコミやウキルアーの釣り人が順々に並んでいった。

河口付近で赤の点滅電気ウキが弧を描いて飛んでいくようになった。その光がいくつも波間に煌めいて漂うようになってきたので私もそれに倣う。私の隣にいた昨日からの子連れ釣り師も同じようにルアーを飛ばした。そしてその竿を子どもに持たせた。その子どもは小学1年生で、今日は月曜日だが、昨日の学芸会が終わった後、お父さんと一緒にサケ釣りに来ていたのだ。子どもはルアーを引き終わると竿をまたお父さんに預けてルアーを飛ばしてもらう。そんなことを繰り返していたのだ。シャケがかかった時にはどうするのだろうか。できることなら、お父さんの力を借りることなく最後まで取り込んでもらいたいものだ。しかし、もしそれが現実のものとなってしまったら、この子は今後どのように育っていくのだろうか。こんな小さなうちにシャケ釣りの醍醐味を覚えてしまったら、他の大きな魚に感動しないのではないだろうか。シャケ釣りでは飽き足らず、ハワイのカジキマグロやアラスカのハリバットなどを釣らないと満足しないようになってしまうのではなかろうか。

そんなことをとりとめもなく考えているうちにも、誰にもシャケが掛かることはなく、昨日のように一人、また一人と引き上げていった。河口付近の釣り人もまばらになってきたので、私は河口寄りに移動して竿を振った。

ルアーを取り換えようと道具入れの所に戻ってみたが、どこにも見当たらない。私は、塩水のついたルアーをそのままタックルボックスに入れてしまうと他のルアーにも塩水がついてしまうのが嫌で、使ったルアーはその辺の石原に置いていた。それがどう探しても

見当たらない。それが、胸ポケットから煙草を取り出そうとした時に見つかった。道具入れのところまで戻らないで、その場で取り換えることが出来るようにと胸ポケットに入れておいたものだ。それさえも忘れてしまっていたのだ。

そのアワビ貼りブルーのルアーを遠投した。すぐにコツコツ、グンググーンと向こう合わせでシャケが掛かった。去年は、使い古した道糸のせいで何度も仕掛けをシャケに持って行かれた。それに懲りていたので、シャケ用のリールには新しいPE 2号の道糸を巻いていたのだ。ハリスも5号のシーガーエースにしてある。大きなシャケだったが自信を持ってあげることが出来た。

かなり年配に見える釣り人が隣に入った。その釣り人が、ペンチを貸してくれないかと言う。

「昨日は掛かったシャケを取り込む寸前に逃げられた。今朝は車の中で寝過ごしてしまって慌てていたものだから、車のドアを閉めた時にベキッと竿を折ってしまった。誠についでいない」と昨日からの経過を話してくれた。彼の竿を見ると、2本継ぎの穂先の根元が折れて、元竿の差し込み口に入ったままになっている。折れた部分を指先で取り出そうとしてもどうにも埒があかないのでペンチで引っ張り出そうというつもりらしい。彼はペンチを使って折れた部分を抜き出すことに成功し、一回り細くなった穂先の根元を元竿に刺し直してからビニルテープでグルグル巻きにした。どうにか使えるようになったがシャケがかかった時に無事にあげることが出来るのだろうか。自分のことのように気になって様子を見ていると、ルアーを振り込むことは出来たのだがいかんせん飛距離が出ない。彼は3回ほど竿を振ってから諦めがついたらしくその場を立ち去っていった。

私はエサに用意した塩ニンニクカツオ6枚を全て使い切った。赤イカは少し残っているが、彼と同じような無駄な足掻きになってしまうような気がして引き上げることにした。今年はまだこの1本でよしとしよう。



この1本で満足

一挙手一投足

岩見沢釣遊会第6回大会のエサを購入しようと市内の釣り具店をまわったが、Mサイズのイカゴロがまたしても置いていない。今年の異常な海水温の高さでマイカ魚が不調でゴロが卸売問屋でも入荷がないということなのだ。普段使い慣れていないLやSのサイズはかろうじてあったので、とりあえずSの方を60本購入した。カジカにゴロは欠かせない。

大会前に嵐氏から電話が入った。今回の大会に北海道釣名人会の金井泰樹氏と近江聡氏に乗っていただけるようになったということである。金井氏は言わずと知れた北海道の釣り会に君臨する名人会で幾度となく年間優勝を果たしており、直近の23年度、24年度を連覇している名人中の名人である。近江氏も25年度大会の第1回、第4回の優勝を果たした強者である。

その第6回大会が10月20日(日)、井寒台～様似港で開催された。今回の大会でも大型台風26号の余波を受けたうねりが心配されたが、当日は風もなくもカジカ波で絶好の釣り日和となった。そして、今回は狭い範囲の釣り場となったため釣り場の選定と釣り技術が試される大会となった。私は、今回の大会は幌島と決めていた。時期による当たり外れの大きいところだが、2006年の大会ではカジカを大釣りして優勝したことがあったのだ。今回の潮加減がその時と似ているのだ。

バスから下ろしてもらって、その優勝した場所に入った。天秤に小さなゴロを2本付けて、近投を繰り返すがアタリは全く出ない。それではと遠投を試みるが、それにもアタリは出ない。海水で手を洗ったがまだまだ温かいのでカジカが岸寄りしていないのだろうか。

右へ50m程移動してみた。ここでも状況は同じなので、とって返して左にある舟揚場に移動して見るもアタリは出ない。白泉方向の舟揚場に点々と入っていた釣り人にも聞いてみたが芳しくない。

月寒方向に見えるギョギョライトを頼りに様子を伺いに行った。誰もが不調な中にも一人だけアブラコ45cm程を頭に5本、カジカも2本上げたとバツカンを見せてくれた。入ってすぐの潮込みの時間帯にバタバタと来たということで、今は小休止しているが潮が動き出す明け方にはもう一度、魚の食い気が高まるだろうと話してくれた。更に私が打っていた右側も魚の濃いところだから諦めないで頑張ってくださいと励まされた。指定されたところに竿を移動させて打っていると何とかハゴトコが2匹来た。しかし、大物はいないようだ。

名人会の金井氏や近江氏が向かった幌別に向かうことにした。国道を歩いていると赤川を挟んだ海岸線で釣り人の姿が見える。しかしどの様に川を渡ってよいのかわからない。国道を戻って白泉の方から海岸縁を歩いて行くと赤川の河口に辿り着いた。まずは道流堤の右で打っていた釣り人に様子を聞くが余りパツとした情報は得られなかった。

満潮時間帯だったので河口付近は流れもあり体全体が水に浸かってしまいそうで渡ることは出来なかった。浅くなったところはないかと上流に遡ってみると、深いところでも太股ぐらいで渡れるところを見つけた。金井、近江氏は暗い内に何本もの大カジカを仕留めていた。早速荷物を担いでストックを突きながら対岸に渡って、2人の左で竿を出した。金井氏によるとよい昆布根があるらしく大アブラコも出るところらしい。だが、この頃には波が高くなり根掛かりを繰り返してしまってハゴトコ1匹に終わってしまった。しかし、名人の一挙手一投足を拝見することが出来て自分にとっては、大変勉強になった大会だった。



金井泰樹氏：軽く振っているように見えるのだが仕掛けははるか遠くへ飛んでいく

審査結果

審査結果

優 勝	佐々木清	1 4 8 4 点	(カカノハ480mm+カジカ 429mm+5750g)	月 寒
準優勝	岡 英成	1 2 8 7 点	(アブラコ419mm+カジカ 384mm+4840g)	月 寒
3 位	近江 聡	1 2 7 1 点	(カジカ 453mm+アブラコ268mm+5500g)	幌 別
4 位	吉本孝則	1 0 3 3 点	(カジカ 436mm+アブラコ253mm+3440g)	鵜 苫
5 位	前野達志	9 7 3 点	(アブラコ385mm+カジカ 346mm+2420g)	東井寒台
身長優勝	西川紘一	1 2 5 0 点	(アブラコ458mm+カジカ 384mm+4080g)	月 寒

総合優勝者は、佐々木 清氏だった。彼はタカノハやクロガシラを狙って月寒を釣り場に選定し、その狙いを見事達成してきた。仕掛けもカレイ仕掛けにして、根気強く打ち続けタカノハをダブルで射止めるなど、48cmをはじめとする大物タカノハを何枚も釣り上げ、嫁にカジカの大物を引き抜いて審査に提出した。

準優勝は、岡氏だった。彼も、月寒に入り暗い内にカジカの大物を揃え、明けてからの大遠投で大物アブラコを手にしたのだ。総合3位は名人会の近江氏だった。彼は金井氏と共に幌別に入り、暗い内にカジカ45.3cmをはじめとする大物を抜きあげたが最後までアブラコは釣れず仕舞いで、嫁がハゴトコとなってしまった。身長優勝は月寒に入った西川氏だった。アブラコの45.8cmを釣り上げ、総合でも4位に相当する釣果を上げた。

今年度は1・2・3回大会で3連続優勝を果たし、例年のように嵐氏のぶっちぎりの年間優勝だと思われたが、今回の大会で岡氏が4回トータルでは嵐氏を追い抜いてしまった。その差は僅か1点差であり、最終大会での鏝迫り合いが見物である。もちろん佐々木氏が年間優勝の可能性もあるところなので諦めずに頑張って貰いたいところだ。

平成25年度の釣りも後残すところ八雲港～森港の区間で開催される7回大会のみとなった。この区間でも、年々釣果を上げてきている釣遊会の面々だが、更なる大物を釣り上げてきてほしいものである。もちろん、私もそのうちの1人になりたいものだ。



左から準優勝：岡氏、優勝：佐々木氏、3位：近江氏



佐々木氏の魚